

ジャスパー・ジョーンズの版画は最近でこそかなり一般的になったが、13年前に南画廊の志水さんが、第一回のジョーンズ版画展を催された頃はまだごく限られた人達にしか知られていなかったように思う。この1967年の版画展で小生は始めてジョーンズをまとめて見る機会を得たのだが、その時は著しい違和感を持ったのを憶えている。サッパリワカラン、という感じで当惑したのを今も鮮明に思い出すことができる。

著しい違和感と言ったが、それは要するに従来の見慣れた絵画に当時の小生は慣らされていたからであろう。また、同じ現代アメリカ絵画でもサム・フランシスやR・ラウシェンバーグの方がずっとワカリはよかったのである。別言すると、この著しい違和感は、小生がジョーンズの絵画がもつ強靱な思考性とでも言うべきものにハネ返されたからである、と今にして思うのである。爾来十数年、ジョーンズは次第に小生の世界のなかで大きくなり、今やもっとも面白い作家の一人となってきている。

今回の展示の中心をなす1st Etchings, 2nd State(13点, 1967~9)はその名の示すとおり、ジョーンズの最初のエッチングの作品である。1st State(1967~8)はエッチングの線のみで甚だシンプルであるが、この2nd Stateの作品はアクアチントまたはオープン・バイトが加えられ、ずっと重厚なものとなってきている。

この13点の作品は大別すると3つに分れる。すなわち、第一のグループは1st Etchings 1st Stateの6点にアクアチントまたはオープ

ン・バイトが加えられたものである。(No. 1～6)。次にこれは1点のみであるが、1st Etchings 1st State のポートフォリオのカバーになった作品(Ale Cans)にアクアチントが加えられたものである(No.7)。そして第三のグループはフォトエンレイビングにエッチングまたはオープン・バイト(これは1点のみ)を加えたもので、第一のグループと同数の6点である(No.8～13)。このフォトエンレイビングは彼のオブジェを写真に撮ったものから作成されている。

そして、ひとわり作品を並べてみると気付くことであるが、第一のグループと第三のグループのモチーフは同一である。すなわちFlashlight, Light Bulb, Ale Cans, Paint Brushes, Flag, Numbers というジョーンズの典型的なモチーフ6点が2つずつ計12点並び、それをつなぐ中間点にAle Canのラベルが置かれているという次第である。

ところでオープン・バイト(Open bite)というききなれない言葉であるが、大きな辞書などひっくり返して調べたけれどもよく分らなかった。たまたま加納光於さんにご教示いただく機会があり判明したが、これはアクアチントのように松ヤニで銅版を腐食するのではなく、直接、ジカに酸で銅版を腐食する技法である。ご参考までにひとこと付け加えて置きたい。

さて、ジョーンズは版画をこれまでに何点作っているであろうか?年代別手法別にみるとどうなっているであろうか?このことについては巻末に一覧表で示してあるのでご覧いただきたい

い。一覧表はR,S,Field氏のジョーンズの版画カタログレゾネから作成したもので、1960から77まで集録してある。このレゾネはよく利用するが、大変詳細なもので感嘆している。

このレゾネによるとジョーンズは1977年までに260点の版画を作成しておりその手法別うちわけはリトグラフ171点、シルクスクリーン15点、エッチング・アクアチント66点、その他(レッドレリーフ、ステンシル、エンボス等)8点となっている。銅版画についてみると67年の1st Etchings 1st State 7点および2nd State 13点計20点、それから76年のベケットの33点がその主なるものである。またエッチングもリトグラフも最初の作品はターゲットであったというのも興味深い。今回の展示では最新作(79年)のターゲット(カラー、ハードグラウンド・ソフトグラウンドエッチング、アクアチント)を並べている。

最後にジョーンズの芸術を知るための参考書となるとジョーンズと親しい東野芳明氏の「ジャスパー・ジョーンズそして/あるいは」1979、美術出版社刊がよい。この本はこれまでにジョーンズについて書かれたエッセイがとりまとめられて一冊の本に仕立てられたものであるが、そのなかでも「ミルとミルクは同じかな?」の一章が包括的で、美術史的な位置づけも理解され小生には面白かった。お忙しい^{ムキ}向はこの一章を。

1980年1月

佐谷和彦